

紳士風情

「月うさぎ」

登場人物

島村香澄 (17)  
藤本公一 (36)

高校2年生  
香澄たちの担任

中澤瑞希 (17)  
高岡知穂 (17)  
尾崎有美 (28)

香澄と同じクラスの高校2年生  
香澄と同じクラスの高校2年生  
藤本と同期の教師

伊東 (41)  
浅田 (48)

天気予報士  
アナウンサー

同級生 1  
同級生 2  
同級生 3  
同級生 4  
先生 1  
先生 2  
先生 3

○教室（昼）

→『9月11日』

昼食を食べる生徒。

食べ終えて友人と話す生徒。

授業の準備をする生徒。

窓際の席、つまらなさそうにスマホで

天気予報を見る島村香澄（17）。

伊東（41）の声、スマホから流れる。

伊東の声「来週も晴れの日が続き、とても過

ごしやすい気温になるでしょう。えー、そ

のおかげか、27日には綺麗なスーパーム

ーンがみられるかもしれませんね」

雲一つない空を見る香澄。

はす向かいの席に座る同級生4。

彼女を囲うように集まった同級生1、

同級生2、同級生3。

同級生1「もうフォロワー10万人!？」

同級生2「やば! どの動画もめっちゃバズ

ってんじゃない」

同級生3「これとか他垢まで回ってきたわ。

マジすごすぎ」

騒がしい様子の同級生1と4。

ジッと見つめる香澄。

再びスマホから、今度は浅田（48）

の音が流れる。

浅田の声「伊東さん、そのスーパームーンと  
いうのは一体どういった月のことを指すの  
でしょうか。近年よく耳にしますが、定義  
などは」

同級生からスマホに視線を戻す香澄。

机の下からフリップを出す伊東。

伊東の声「実はとても曖昧なのです。簡単に  
言いますと、一年間で最も大きく見える月  
のことなのですが、この大きさというのに  
具体的な基準が存在しません」

浅田の声「では、あくまで大きく見えるだけ、  
といった感じですか」

伊東の声「そうですね。ですが滅多に見られ  
ませんから！ 地球との距離が縮まった美

しい月を堪能してみるのも面白いと思いま  
すよ」

席に着く中澤瑞希（17）。

気が付いて声をかける高岡知穂（17）。

瑞希「おかえりー、瑞希ー」

瑞希「ただいま」

振り向く香澄。

香澄「呼び出しなんて珍しいじゃん。どうし  
たの」

瑞希「なんか進路のことだった」

知穂「進路？　なんで？」

香澄「ちゃんと決めてたよね」

瑞希「候補はね。本命決めんのめんどくさく  
って先延ばしにしてたから」

瑞希、鞆の中から教科書を取り出す。

香澄「就職に有利な大学だっけ」

瑞希「そ。先のことです苦勞したくないし」

知穂「先延ばしにしてたのにー？」

瑞希「それとこれとは別」

机の上に筆箱を置く瑞希。

香澄「でもすごいよ。大学の先も考えてるな  
んて」

知穂「それな。さすがしっかり者の瑞希さん」

瑞希「あんただって調理師目指すんでしょ。

それと一緒にだつてば」

知穂「いやいやいや！ 必ずしも調理師にな  
れるとは限らないじゃん？」

瑞希「そう？ あんたならなれそうだけど」

談笑する瑞希、知穂。

前を向く香澄。

時計、十二時五十九分。

香澄、スマホの電源を落として鞆にし  
まう。

瑞希「あ、香澄」

香澄「ん？」

瑞希「あんたも呼ばれるかも」

香澄「え、なんで？」

瑞希「それは知らないけど、帰り際に……多分呼び出しリストだと思うけど、あんたのところにも丸ついてたから」

香澄「……わかった。ありがとう」

チャイムが鳴って一斉に席に着く生徒たち。

香澄、頬杖をついてもう一度空を見上げる。

○教室（夕）

4つの机に1対1で座る香澄、先生1。

先生1「突然呼び出したりしてごめんね。え

っと、島村さんは」

香澄「私、月に帰りたいんです」

間髪入れずに言う香澄。

目を丸くする先生1。

先生1「……えっ、どういうこと？」

○教室（夕）

→『9月12日』

対面する香澄と先生2。

香澄「どうすれば月に帰れますか」

先生2「……あの、根本的に無計画で月に行くのは無理だと思うんだけど……」

眉をひそめる香澄。

○教室（夕）

→『9月13日』

香澄、先生3と対面する。

香澄「どうしても月に帰りたいんです」

ため息を吐く先生3。

先生3「……他の先生方から伺ってはいましたが、どうしても急にそんなこと思ったのか、教えてもらってもいいですか？」

香澄、真顔のまま、

香澄「すいません。何でもありません」

と素っ気なく言い放つ。

○教室（夕）

→『9月17日』



背筋を伸ばして座る香澄。

その斜めにペンを回しながら机の上に

置いた紙を見る藤本公一（36）。

香澄「私、絶対に月に帰ります」

藤本「へー……いいんじゃないね」

ペン回しを止める藤本。

藤本「じゃあ将来の夢は月に帰るってことで

いいな」

香澄の顔を見る藤本。

香澄、怪訝な顔をする。

藤本「いやお前が言ったんだろ」

香澄「言いましたけど。他の人たちみたいに

変だとは思わなかったんですか」

藤本「別に。行けねええところじゃねえし」

空白の進路希望調査票に『月に帰る』

と書く藤本。

藤本「どうやって帰る？」

香澄「ちよっと待ってください。あまりにも

スムーズすぎてついていけないっていうか。

普通、何でとか聞きませんか？」

藤本「聞いてほしいなら聞くぞ」

香澄、しばらく黙って、

香澄「いいです。すいません」

と小さく頭を下げる。

藤本「どんな理由だって俺はかまわねえよ。

で、どうやって帰りてえの？」

香澄「……考えたことなかったです」

顎に手を当てる藤本。

藤本「……ま、ここは宇宙飛行士になってとか、か」

第一希望に『宇宙飛行士（仮）』と記載する藤本。

香澄「私、頭悪いんですけど大丈夫ですか」

藤本「そこはどうにかしてくれ。俺も協力すつから。とりあえずこれでいいな」

『宇宙飛行士（仮）』を見る香澄。

藤本、再びペンを回す。

藤本「でも考えてみればどうやって宇宙飛行士になるかなんて知らねえな」

香澄「試験とか受けるんじゃないんですか」

苦笑する藤本。

藤本「ふわっとしてんな。それがわかんなかったらなれねえじゃんか」

香澄「そんなの私も知りませんよ」

数秒考えこむ香澄、藤本。

藤本「なら知るしかねえな」

回していたペンを置いて腕時計を見る

藤本。

藤本「よし！ そうと決まれば善は急げだ」

名簿を持って立ち上がる藤本。

香澄「え、はい？」

藤本「図書館だよ。知ると言えば……図書館  
だろ」

香澄「直球すぎませんか？」

扉を開けて待つ藤本。

藤本「話が早くていいだろ。行くぞ」

香澄「……はい」

渋々席を立ちあがる香澄。

○図書館・天文コーナー（同）

香澄、宇宙飛行士に関する本を探す。

藤本、脱線して料理本を読む。

藤本「こうやって見たらクロワッサンも月っ

ぽいよな」

香澄「先生、何しに来たんですか」

藤本「この時間って腹減んね？ 昼と夜の間

つつーの？」

香澄「めっちゃ食べる人じゃないですか」

藤本「めっちゃ食うな。一日五食が理想だわ」

引き続き料理本を読む藤本。

放置して一人で本を探す最中、6歳頃

の記憶が蘇る香澄。

× × ×

知穂「まだ帰りたくないー！」

泣きじゃくる知穂。

涙を堪えるも零す香澄、瑞希。

× × ×

香澄、本の背表紙をなぞる。

科学関係の本棚に紛れ込んだ写真集。

気になって手に取る香澄。

宇宙で撮った写真の中に一枚だけ地球から撮ったと思われる月の写真。じつくり見る香澄。

藤本「何しに来たんですか、島村さん」

小馬鹿にしながら香澄に近づいた藤本。

香澄「……なんでもありません」

本をばたんと閉じる香澄。

藤本「気になったんだろ。せっかくだし借りてけよ」

表紙を見つめる香澄。

香澄「重たいんでまた今度にします」

写真集を元に戻す香澄。

何か言いたげだが飲み込む藤本。

藤本「もう少し探してみっか」

資料探しを再開する香澄、藤本。

○図書館・カウンター付近（同）

天文雑誌のアーカイブを漁る藤本。

藤本「マジで！？」

藤本、大声を出して視線を集める。

藤本「……あ、すんませーん」

声に気づいて近づく香澄。

香澄「急にどうしたんですか」

藤本「アポロ11号って月面着陸してねえか  
もしんねえんだって。島村お前知ってた？」

香澄「なんとなく聞いたことは」

「藤本から雑誌を受け取る香澄。」

藤本「てことは、もしかしたらお前が世界初  
の月面着陸ガールになったり？」

香澄「でも一応アポロ11号は月面着陸した  
ってことになってますし」

内容を読む香澄。

『アポロ計画 捏造か』の文字。

藤本「何にせよ、そこまでして月に行きたか  
ったってことだろ。いつの時代も夢見てる  
奴はそれなりにいるもんだなあ」

横から覗く藤本。

香澄「……人類の夢」

香澄、雑誌の一文を声に出す。

藤本、宇宙飛行士の写真が目に入る。

藤本「そういえば月面着陸した宇宙飛行士の  
名前なんて聞いたことねえな。今なら間違  
いなく有名に」

香澄「わざわざこんなことしなくたって簡  
単に有名人になれますよ」

藤本の言葉を遮る香澄。

藤本、雑誌から目を離さない香澄を見  
る。

藤本「誰もが簡単に夢を叶えられるから、誰  
にもできないことをやろうとしてんのか」

香澄、6歳頃の記憶を脳裏に過ぎらせ  
る。

× × ×

テレビのゲーム画面に月の映像。

香澄「じゃあ、みんなで月に行こっか！」

知穂、泣き止む。

きよとんとする瑞希。

次第に笑顔になっていく瑞希、知穂。

× × ×

香澄「そんなんじゃないやありません。今更になつて大層な理由が聞きたくなりましたか」

雑誌を元に戻す香澄。

藤本、香澄の背中を見る。

藤本「んな野暮なことしねえよ」

○廊下（同）

調べ終え、教室に戻る香澄、藤本。

歩きながらコピーした資料を読む香澄。

香澄「やっぱり理系の大学ですかね」

藤本「ま、だろうな。あと英語だろ……それにロシア語も必要だよ」

香澄「ロシア語ってマトリョーシカとか」

藤本「ピロシキも確かロシア語だったよな」

香澄「ピロリ菌？」

藤本「ピロシキな。カレーパンみたいなやつ」

香澄「食べたことあるんですか？」

藤本「ない。大体ロシアなんて行ったことねえよ」

香澄「英語の先生なのに？ ですか？」



藤本「何なら日本から一步も出たことねえ」

香澄「それは意外です」

職員室の前で足を止める藤本。

藤本「机とかそのままでもいいから。今日のと

ころは解散つーことで」

香澄「資料も放っておいていいんですか」

藤本「ああ。大事なもんはちゃんと持ってる」

藤本、紙の束を持ち上げる。

頭を下げてから教室に向かう香澄。

後ろ姿を見届ける藤本。

藤本「あ！」

突然声をあげる藤本。

香澄、振り返る。

藤本「〃月うさぎ〃ってのはどうだ」

顔をしかめる香澄。

香澄「何ですか、その変な名前」

藤本「いいだろ。愛称的な？」

香澄「愛称って……。小学生じゃないんだか

ら

あからさまに嫌がる香澄。

藤本「この件に関してのクレームは受け付け  
ませーん」

藤本、呑気に手を振りながら職員室に  
入る。

香澄、背を向けて歩き出す。

○教室（朝）

→『9月20日』

職員室に入る尾崎有美（28）。

有美「おはようございます」

藤本「おー。はよー」

隣の席に鞆を置く有美。

パソコンで月について調べる藤本。

有美「何してるんですか？」

横から割り込む有美。

藤本「おい邪魔だよ、見えねえ」

有美「月？ どうして月なんです？」

藤本「必要だからに決まってるだろ」

藤本、有美を手で押しのける。

有美「どうして！ 必要なんですか？」

藤本「（めんどくさそうに）あー？ 最近月に興味を持ったから？」

有美「自分のことなのに疑問形？」

藤本「何だっていいだろ、んなの」

『月 帰り方』で検索する藤本。

有美「私は興味ありますけどー？ 藤本先生ってそんなロマンストじゃないじゃないですか」

藤本「馬鹿にしてんのか。俺だって夢見ることくらいあるわ」

手を止める藤本。

藤本「……（小声で）夢？」

有美「夢がどうかしました？」

藤本、有美の方に視線を向ける。

藤本「なあ、尾崎って最後に夢見たのいつ？」

有美「……はい？」

○教室（昼）

香澄、瑞希、知穂、三人で昼食を取る。

瑞希「どう？ 進路相談は」

香澄「うーん……まあまあ？」

知穂「いろんな先生に呼び出されるなんてだるいねー」

視線を逸らす香澄。

瑞希「知穂は結局大学行くの？ 専門学校？」

知穂「専門かなー。短大って言っても大学はどこも学費高いし」

知穂、ため息を吐く。

香澄、箸を持つ手が止まる。

香澄「ねえ覚えてる？ 昔さ、うちの家で遊んでた時、知穂が帰りたくないってずっと泣いてたの」

知穂「なんで急にそんなこと！？」

香澄を見て微笑む瑞希。

瑞希「覚えてる。親がドン引きしてたやつでしょ」

香澄「そう、それ！」

知穂「香澄も瑞希も泣いてたじゃん！」

瑞希「あんたほどじゃない」

香澄「うん。知穂ほどじゃなかったね」

知穂「もー！ 感受性が豊かなんですー！」

卵焼きを頬張る知穂。

笑い合う香澄、瑞希。

扉から顔を出す先生2。

先生2「た、高岡さんいますか？」

知穂「（気が付いて）はい！」

知穂、口元を抑えながら席を立つ。

瑞希「あの頃は楽しかった」

目を伏せる瑞希。

香澄、瑞希の顔を見る。

瑞希、何事もなかったかのように食べ

進める。

○廊下（夕）

同級生4、教室から出てくる。

同級生4「ありがとうございますましたー」

藤本「おう。気をつけて帰れよ」

廊下で待っていた香澄。

藤本「よっ。〴〵月うさぎ〴〵。待たせたな」

香澄「まだ言ってるんですか、それ」

藤本「語呂がいいからな。俺は相当気に入ってる」

藤本、扉にもたれかかる。

香澄「美少女戦士と丸被りですけどね」

藤本「それだけは言うなよ」

○教室（同）

扉を閉める藤本。

藤本「なんかいいのあったか」

香澄「月に帰ること以外考えていません」

藤本「んなの知ってるよ。宇宙飛行士になる

以外に何かいい案あったかって」

席に着く香澄。

香澄「調べましたけど、宇宙飛行士が一番現実的でいいと思いました」

藤本、香澄の前の席に座る。

藤本「となると、これからの課題は勉強方法か」

ノートに『勉強方法』と書く藤本。

藤本「一応、理数系の先生たちに聞いてはみたが」

香澄「先生は小さい頃の夢とか覚えてますか」

藤本、メモする手をとめる。

香澄、藤本の手元を見る。

藤本、ノートを持ち上げて香澄に見せる。

藤本「漫画家」

香澄「ま、漫画家？」

人っぽい形をした人間の絵。

藤本「下手だからやめたけどな」

ノートを机の上に置く藤本。

香澄「描き続ければよかったじゃないですか」

藤本、香澄と目を合わせる。

藤本「たまに、そう思うことはあるな」

香澄「たまに」

藤本「赤点のテスト、採点してる時とか特に」

香澄「どんな時ですか」

うなる藤本。

藤本「漫画家になってたら、俺みたいな教え方へたくそな教師と出会ってなかったかもしれねえのに、みたいな」

香澄「そんなのわからないじゃないですか」

驚く藤本。

香澄「今しか起こっていないのにもしものことなんて誰にも……なんですか」

藤本、口元を手で隠す。

藤本「いや、まさか島村に励まされるとは思ってもなかったから」

香澄「……たまたまです」

視線を逸らす香澄。

藤本「そう考えたらお前の夢っていいよな」

香澄「夢なんて……あ、月に帰ることか」

藤本「忘れんなよ。その反応だとまさか他人の夢でしたみたいなき感じに……」

目を丸くする香澄。

藤本「マジで!？」

香澄「過剰反応やめてください」



藤本「誰かの夢を叶えることが島村の夢か。

ますます面白いじゃねえか」

香澄「面白いかどうかで判断してたんですか」

藤本「やべ、口が滑った。とにかく当てずつ

ぼうで言ってみるもんだな」

香澄「さつきから最低なことしか言っていない  
の気付いてます？」

藤本、小声で

藤本「それはすまん」

と謝る。

香澄「ここまできたらさすがに言いますけど、

小さい頃、知穂……高岡さんや中澤さんと

月に行きたいねって話をしてたんです」

藤本「へー。それがきっかけだと」

香澄「あくまできっかけですけど」

藤本「よくそんな小さい頃のことなんて覚え

てたな」

香澄、視線を落とす。

藤本「年取ると忘れっぽくなるんだぞ。覚え  
てるだけでもすげえよ」

香澄「藤本先生だって覚えてたじゃないですか」

藤本「……（てきとうに）あー、それは俺がロマンチストだからじゃね」

香澄、怪訝な顔。

藤本「もはや懐かしいな、その顔」

ノートにきっかけをメモする藤本。

深くため息を吐く香澄。

香澄「私、先生みたいになりたかったなー」

藤本「やめとけ。てきとうに仕事しないでく

ださいって言われんのがオチだぞ」

香澄「てきとうなんかじゃありません」

香澄、やや前のめりになって。

香澄「先生だけが話を聞いてくれました」

藤本、香澄の顔を見る。

○教室（昼）

↳ 『9月24日』

授業終わり、知穂に話しかける生徒1、  
2、3。

生徒2 「高岡さんって調理師になるんだよ

ね？」

生徒1 「え、そうなの！？」

振り向く、生徒1。

生徒3 「調理師ってすごくない？」

生徒1 「なりたくてもなれないし！」

知穂 「（苦笑しながら）でもまだなれるって

決まったわけじゃないよー」

生徒2 「えー！ 高岡さんならいけるって！」

生徒1 「大変だと思うけど、頑張ってるね！」

知穂 「……うん。ありがとー」

席を立つ生徒1、2、3。

知穂、ややうつむき気味。

○廊下（同）

香澄の元へ駆け寄る知穂。

知穂 「ごめーん。待ったー？」

香澄 「ちよつとだけ。遅かったね、知穂」

歩き始める香澄、知穂。

知穂 「……井戸端会議に巻き込まれた」

香澄 「井戸端会議？」

黙る知穂。

知穂 「応援されたら嬉しいよね、普通」

香澄 「言葉によるでしょ、そんなの」

再び、黙る知穂。

香澄 「なんか言われたの？」

香澄、知穂の方を見る。

知穂 「調理師になるって話、聞いてたみたい」

どこか悲しそうな表情の知穂。

知穂 「人の目ってさー、なかなか避けられな

いんだねー」

○教員室（昼）

職員室に入ってくるなり、真っ先に藤

本のところへ向かう先生3。

先生3 「藤本先生！ 一体どういうおつもり

ですか」

パソコンから目を離さない藤本。

藤本 「何がです？」

先生3 「島村さんのことです」

藤本、先生3をちらつと見る。

先生3 「変なこと吹き込んで……月に行きた  
いなんて無謀なことを」

藤本 「島村は月に帰りてえんすよ」

先生3を睨む藤本。

藤本を見下す先生3。

先生3 「重要なのはそこではありません。絶  
対に行けないとわかっけていてなぜ希望をも  
たせるようなことをさせるのです！」

藤本 「それを勝手に決めつけてるのは俺たち  
でしょう。島村が月に帰れるか否かは島村  
次第で」

先生3 「では彼女がづらい目に遭ってもいい  
と？」

藤本 「そんなこと言ってませんよ。島村がや  
りたいと思うこと応援して何が悪いんです  
か」

先生3 「応援だけなら貴方でなくてもできま  
す。私たち教師の役目は生徒がより良い未  
来になるよう導くことです」

藤本「たかが教師ごときが一人の人生、豊かにできるわけないでしょう」

先生3「だからてきとうにやっても許されるところ。そんなの開き直りにすぎません」

静まり返る職員室。

先生3「藤本先生、ご自分がどれだけ残酷なことをやっているのか理解していますか」

電話が鳴り響く。

先生2、受話器を取って先生3を見る。

先生2「お、お取込み中すみません……こ、

校長先生がお呼びです……」

踵を返す先生3。

藤本、背もたれに身を委ねる。

藤本「（小声で）無力でも無力なりにできること探してんだよ」

遠くの方で藤本を見る有美。

○図書館・天文コーナー（同）

写真集を探す香澄。

香澄「（小声で）どこだろう……」

香澄、腰を下ろして隅々まで探すも見  
つからず、別のコーナーに移動する。

○図書館・写真コーナー（同）

背表紙をなぞる香澄。

香澄「（小声で）……ない」

○図書館・カウンター付近（同）

香澄、天文雑誌のアーカイブを漁る。

香澄の近くで若手有名人が表紙の雑誌  
を見て楽しむ生徒たちの姿。

じっと見つめた後、いなくなったのを  
確認して近づく香澄。

香澄と同世代の人たちが活躍している  
様子の記事。

香澄「（小声で）私だけ、か」

香澄、雑誌を投げ捨てるように入れ、  
そのまま背を向けて図書館を後にする。

○教員室（夕）

誰もいない職員室。

有美「どうぞ」

有美、缶コーヒーを差し出す。

藤本「どうした。今日は俺の誕生日じゃねえぞ」

有美「誕生日だとしたらもつといいもの贈りますよ」

自分の缶ジュースを開ける有美。

有美「ちよつとだけ、言いたいことを言ってくれたお礼です」

藤本「なんだそれ」

鼻で笑う藤本。

有美、一口飲む。

有美「応援したい気持ちはわかります。でも生徒たちにはつらい思いをしてほしくないから、ある程度成功が約束された方を選んでしまうのもわかります」

缶ジュースを見つめる有美。

有美「結局、何がその人にとっていいかを決めるのはその人自身なのに、それでも同じ



人間である以上、お節介を焼きたくなつちやうんですんよね。特に自分が教師だと」

有美、缶ジュースを優しく包むように持つ。

有美「みんなが幸せになればいいのに」

苦笑する有美。

有美を見つめる藤本。

藤本「そしたら幸せも当たり前になっていつか感じなくなっちゃうぞ」

有美「不幸な人がいるから幸せな人もいるってこと？ 藤本先生、やっぱり考え方が残酷すぎます」

藤本「それが事実だろ」

藤本、缶コーヒーのタブを開ける。

藤本「事実を踏まえた上でどうするかが大事なんじゃねえのかよ」

有美「……普通、そんな風には思えませんよ」

缶コーヒーを飲む藤本。

有美、つられてジュースを飲む。

×

×

×

藤本「島村がやりたいと思うこと応援して何が悪いんですか」

先生3「応援だけなら貴方でなくてもできます。私たち教師の役割は生徒がより良い未来になるよう導くことです」

× × ×

藤本「……応援って便利な言葉だな」

有美「言うのは簡単ですから」

藤本「だな」

缶コーヒ―を机の上に置く藤本。

有美「でも、その言葉があるのとないのとは全然違いますよ」

缶ジュースを飲み干す有美。

有美「確かに、簡単に言えますけどそれが悪いこととは思いません。誰でも伝えられるからこそ素敵な言葉じゃないですか」

目を細める藤本。

藤本「……お前って眩しいよな」

有美「眩しい？ 発光してませんか？」

藤本「そういう意味じゃねえ。物理的なわけ  
ねえだろ」

笑う有美。

缶コーヒーを一気飲みする藤本。

○廊下（昼）

↳ 『9月25日』

職員室の前で藤本と対面する香澄。

香澄「明日、月に帰ります」

藤本「いつも急だが、今日はやけに急かすな」

香澄、拳に力を込める。

香澄「冷やかされるのも時間の問題だって気

づいたからです」

藤本「冷やかされるって誰に」

香澄「みんなにです」

藤本「そんなの気にしなきゃいいだろ」

香澄「気にしたくなくても気にしちゃうんで  
す」

藤本、有美に呼ばれる。

藤本「ちよつと待ってる。今大事な話してんだ」

有美、香澄と目が合う。

藤本「明日の放課後まで待ってくれ」

香澄「……考えておきます」

頭を下げ、教室に戻る香澄。

藤本、香澄の背中を見届ける。

○階段（夕）

→『9月26日』

香澄、スマホで月の画像を見る。

『スーパームーン 次回 9月27日』

と書かれたニュース記事。

机に突っ伏す香澄。

○教員室（同）

ニュース映像を映したモニター。

先生1「最近また増えてますね」

先生2「ど、どうして追い詰められる前に相

談してくれないんですかね……」

キーボードで文書を打ち込む藤本。

× × ×

香澄「明日、月に帰ります」

× × ×

藤本、立ち上がる。

藤本「まさか……！」

先生1、2、藤本を見る。

職員室から飛び出す藤本。

扉の前で藤本とすれ違う有美。

有美「うわっ！ えっ、藤本先生！？ ちよ

っと、どこに行くんですか！」

○教室（同）

藤本、室内見て、

藤本「島村！」

と叫ぶ。

鞆のみが残され誰もいない。

○廊下（同）

走って香澄を探し回る藤本。

○図書館（同）

藤本、扉を開ける。

自習する数人の生徒たち。

藤本、辺りを見渡し、いないことがわかってから出て行く。

○踊り場（同）

立ち止まって階段の先を見上げる藤本。

藤本「頼むからやめてくれよ……！」

○屋上（同）

藤本、階段を駆け上がって勢いよく扉を開ける。

柵に足をかける香澄。

藤本「島村！」

香澄の腕を掴む藤本。

香澄「びっ、くりした」

藤本「こっちの台詞だよ。マジで月に……」

香澄「え？」

藤本、はっとして香澄の腕を離す。

藤本「いやなんでもねえ。つーか何してんだ

よ、こんなところで」

柵に手をかける香澄。

香澄「……一人になりたい時ってわかりますか」

藤本「わかるわ。そこまで空気読めねえ奴じやねえよ」

香澄「まさに今空気読めてないんですけど」

藤本、しゃがんで柵にもたれかかる。

藤本「これならお前の視界に入んねえだろ」

香澄、足元を見る。

香澄「無理があります」

一歩も動こうとしない藤本。

諦めて柵の向こう側を見る香澄。

香澄「どうしてここにいてるって」

藤本「勘」

藤本をちらっと見る香澄。

香澄「……刑事か」

黙る香澄、藤本。

ゆっくりと口を開く香澄。

香澄「ここからは大きな独り言ですから」

藤本「耳塞げってか」

香澄「……お好きにどうぞ」

藤本、姿勢を正す。

香澄「私、知らない間にみんなが大人になっ  
ていくのが怖いんです。置いて行かれるよ  
うな感覚で。なんで生きてるんだらうとか  
変なことばっか考えちゃって」

見上げる香澄。

香澄「みんなみたいにやりたいことなんてな  
いし、かといってこのまま平凡で終わるの  
は嫌だなーとか」

香澄、瑞希の言葉を思い出す。

× × ×

瑞希「あの頃は楽しかった」

× × ×

香澄「特別な何かにも簡単になれるならわざ  
わざ自分じゃなくつてもいいじゃん？ で



も誰かを励ませるほどの力があればよかつたのになーとか」

知穂の言葉を過らせる香澄。

× × ×

知穂「人の目ってさー、なかなか避けられな  
いんだねー」

× × ×

香澄「ほんと、矛盾だらけ。生きる理由もなければいなくなる理由もない。ならいつそ月でも行ったらいいことあるかなー。でも行ったら戻んなきゃいけないのかー。じゃあ帰るか。そんな単純な理由です、月に帰りたかったの」

香澄、目を伏せる。

藤本「今のどこが単純なのか理解できねえんだけど」

香澄「みんな真剣に将来について考えてるじゃないですか。私だけ逃げたいみたいな」

藤本「昨日も言ってたな、それ。みんなって具体的に誰よ。つか逃げることの何がいけねえの」

香澄「本気で言ってます？」

言葉に怒りを滲ませる香澄。

香澄「逃げたら逃げ癖がついちゃうでしょ。」

向き合わなきゃいけないこととか

藤本「向き合わなきゃいけないことって……んなこと言ったら常時、逃げちゃいけないことばっかじゃねえか」

香澄、藤本をじっと見つめる。

藤本「そんなにアクセル踏み続けたらいつか故障すんぞ。メンテナンスも補給も必要なことだろ」

藤本、立ち上がって香澄の隣に並ぶ。

藤本「ここからは俺のでけえ独り言だ。聞いてくれ」

校庭を見る藤本。

部活中の生徒たちの姿。

藤本「昔、恩師に言われたんだ。お前は成功と失敗、経験の違いをわかってないってな。何言ってるんだこのクソ教師って当時は思ってたよ」

香澄「口悪いですね」

藤本「絶賛反抗期だったからな」

苦笑する藤本。

香澄「それで、わかったんですか？」

藤本「まったく。そもそも成功とか失敗とか、それら全部を経験って言うんじゃないのって思ってたからな。俺が人のこと理解しようとしてねえのもあるが」

藤本、空を見上げる。

藤本「今でも変わってねえ。成功だの失敗だのどうせ他人が傍から見て決めつけたことにすぎねえだろ」

香澄を見る藤本。

藤本「いなくなりてえと思ってる奴を止められるほど俺は大層な人間じゃねえ。だから、俺なりにできることをやる」

藤本と目を合わせる香澄。

藤本「俺はお前の話を聞いてよかったと思ってるよ。少なくとも、島村は俺にチャンスをくれた」

微笑む藤本。

藤本「さんきゅ、島村」

前を向く香澄。

香澄「それだけですか」

藤本「これが俺の精一杯」

香澄「そうじゃなくって、私が生きる理由ってそれだけですか」

藤本、間を空けてから。

藤本「足りねえって思うなら増やすんだな」

香澄「……そっか、増やすこともできなくはないのか」

香澄、柵に背を向ける。

香澄「さっきお礼言っていましたよね。限界とも言っていましたよね」

藤本「言ったな」

香澄「ジュースくらい奢ってくれたりとかし  
ないんですか」

藤本「急に凶々しいな」

香澄「月に帰ったらジュース飲めないかもし  
れませんか」

藤本「無重力でジュースとか大惨事だな。

……いやそうじゃねえだろ。だったらどう  
やって生活するつもりだよ」

香澄「誰か開発してくれないかな」

藤本「大事なところ、他人任せかよ」

小さく笑う香澄。

ほっとした顔の藤本。

藤本「……前に、俺みたいになりたかったっ  
て言ってたよな」

香澄「あー、ありましたね」

藤本「そんな時、こうとも言ってたよな」

× × ×

香澄「先生だけが話を聞いてくれました」

× × ×

香澄「言いましたね」

藤本「なればよくねって言葉は軽いか？」

香澄、藤本を見る。

藤本、香澄を見る。

藤本「まだまだ地球も捨てたもんじゃねえと  
思うぞ」

○教室（昼）

授業と授業の間の休み時間、移動教室

先で話し合う香澄、知穂、瑞希。

スマホでSNSをチェックする知穂。

知穂「見てこれ！ すごく綺麗じゃない？」

大きく丸い月の画像。

瑞希「準備とかするの時間かかってそう」

前のめりになってスマホの画面を見る

香澄、瑞希。

知穂「人工衛星で撮ったとか？」

瑞希「地球からは無理でしょ」

香澄「できるよ」

同時に香澄を見る瑞希、知穂。

知穂「香澄知ってるの？ この写真」

香澄「ううん、この写真は知らないけど別の写真でこういうの見た」

知穂「へー！」

撮影者を調べる知穂。

知穂「ほんとだ！ これ！ もう一枚の写真

真！ 見て、東京のビル街だよね！？」

瑞希「……すご」

顔がほころぶ香澄。

目を丸くした後、香澄を見てニヤニヤ

し出す瑞希、知穂。

瑞希「で、どうしたの香澄？」

香澄「え？ 何が？」

知穂「何かいいことあったー？」

詰め寄る瑞希、知穂。

香澄「と、特にないよ」

静かにしゅんとなる知穂。

香澄「今はまだ言えない、ごめん」

知穂、瑞希と顔を合わせる。

知穂「じゃ！ 言えるようになったら、ね！」

瑞希「もちろん無理強いはしないから」

瑞希と知穂を見る香澄。

香澄「ありがと、瑞希、知穂」

○廊下（夕）

部室に向かう生徒。

教室に入る生徒。

○教員室（同）

つるされたモニターに伊東の姿。

伊東の声「本日も夜まで空気が澄み切って穏

やかな一日になるでしょう」

動きを止めて、天気予報を見る藤本。

伊東の声「待ちに待ったスーパームーンも無

事、見られそうですね」

資料を揃え、持ち出す藤本。

○廊下（同）

教員室を出て先生3と対面する藤本。

藤本、隠さず嫌そうな顔をする。

藤本「……お疲れ様です」



先生3 「残念ながら貴方のおっしゃっていることが全て正しいとは今でも思えません」

立ち止まって後ろを見る藤本。

先生3 「教師という立場である以上、生徒がより良い未来へ進めるよう先導するのが役割です」

藤本 「またその話ですか」

先生3 「わかりあえないとわかっているからこそできる話もあるでしょう」

驚く藤本。

先生3、藤本をじつと見る。

先生3 「私は生徒を想い過ぎたがゆえに、いつの間にかそれを盾に自らを正当化していた。貴方や尾崎先生の言葉で気づかされましたよ」

藤本 「事実を踏まえた上でどうするかが大事なんじゃねえのかよ」

藤本 「盗み聞きしてたんすか」

先生3 「人聞きが悪いですね。嫌でも聞こえてきたんですよ」

藤本を睨む先生3。

先生3 「現に藤本先生は島村さんのありのままを受け入れたことにより彼女はなりたい自分を見つけることができた」

藤本 「差し出がましいようですけど、それは島村自身が見つけたことです」

藤本、真つすぐと先生3を見る。

藤本 「俺のやり方は人によっては、いやほとんどの人間が気に入らないと思います。ほとんど運が良かったとしか……」

先生3、静かに驚く。

先生3 「貴方でも自信をなくすことがあるのですね」

藤本 「俺のことなんだと思ってたんすか」

眉をひそめる藤本。

先生3 「これは失礼。ええ、藤本先生はそう思うでしょう。ですが、私ではなく貴方だった、というのは大切なことです」

優しい笑みを浮かべる先生3。

藤本、つられて少し笑う。

先生3 「引き留めてしまい、すみませんでした」

藤本 「いえ、こちらこそありがとうございますました」

頭を下げる藤本。

藤本 「俺も先生の真面目さをすこしだけ見習います」

先生3 「貴方はあまりにもてきとうすぎます。少しどころか大変、見習っていたきたい」

藤本 「（小声で）結局こうなのかよ」

先生3 「何か」

藤本 「あー、そろそろ行かなきゃなんで」

足早に去っていく藤本。

先生3、呆れながら藤本の後ろ姿を見て、職員室に入っていく。

○教室（同）

→ 『9月27日』

対になって座る香澄、藤本。

藤本、ペンを回す。

藤本「いいのか、月に帰らなくて。せつかく近くまで来てんのによ」

ペンで空を指す藤本。

香澄「まあ、もう少し地球のこと知ってあげてもいいかなって」

藤本の顔を見る香澄。

進路希望調査票に『教師』の文字。

香澄「でも、まだどこか逃げている感覚は残ってますよ。本当にこれでいいのかなって」

香澄、視線を落として不安そうな顔。

ペン回しを止める藤本。

藤本「今できる選択をお前なりに考えた結果なら逃げとは言わねえだろ。良くも悪くも、結果がわかんのは未来だよ」

香澄「なら余計に不安ですよ。未来の自分大丈夫かなとか」

藤本「そこは自分が大丈夫だよって言ってやれよ」

香澄「……そうですね」

微笑み合う香澄、藤本。

藤本「改めまして、ようこそ地球へ。歓迎するぜ、〃月うさぎ〃もどき」

○図書館（同）

香澄と同じ年の少女が月を見上げる写真、見開きで机の上に置かれている。月、少女を照らすように輝いている。

《了》